慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	竹森俊平著 国際経済学
Sub Title	
Author	小田, 正雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1996
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.89, No.1 (1996. 4) ,p.132- 136
JaLC DOI	10.14991/001.19960401-0132
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19960401-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」89巻1号（1996年4月）

書　評

竹森俊平　著

『国際経済学』

プログレッシブ経済学シリーズ，
東洋経済新報社，1995年1月，viii＋364頁

1．序

1980年代に入って，不完全競争と規模の経済を仮定するIndustrial Organization（I-O）Theory of Trade（New Trade Theory）や保護貿易を主張する新しい議論の登場によって，国際経済学は飛躍的に前進し，多くの新しい成果がつけ加えられるようになった。また世界経済それ自体も国際要素移動の活発化と地域化の進展によって，新しい段階を迎えつつある。これらをもとに，内外で国際経済学の優れたモノグラフやテキストが次々に書かれ，我々の選択の幅が大きく広がった。テキストでは，例えばCaves-Frankel-Jones, *World Trade and Payments*, sixth ed, (1993), Ethier, *Modern International Economics*, third ed. (1995), Krugman-Obstfeld, *International Economics*, third ed. (1994)などの伝統的なテキストのnew editionや，Markusen-Melvin-Kaempfer-Maskus, *International Trade*, (1995)が次々に刊行されている。我が国でも，伊藤元重―大山道広『国際貿易』(1985)，伊藤元重『ゼミナール国際経済入門』(1989)，小島清『応用国際経済学』(1992)などの優れたテキストが出版されている。そこに新進気鋭の竹森俊平氏のものされた，非常に説得力のある魅力的な本書が新たに付け加わることになった。国際経済学のテキストの分野でも，product differentiationによるmonopolistic competitionが本格的に行われるようになり，love of variety approachが実感できるようになった。本書の刊行を心から喜びたい。

著者の竹森氏は，慶応義塾大学とロチェスター大学でそれぞれ大山道広教授とRonald Jones教授から国際経済学の本格的なtrainingを受けられ，国際的なjournalに優れた論文を次々に発表されている新進気鋭の研究者である。

期待に違わず，本書は実にすばらしい国際経済学のテキストである。前述のように，I-0 Theory of Tradeの登場や国際要素移動の拡大などによって，いま国際経済学は大きな転換期を迎えており，内外で次々に新しい研究書やテキストが出版されている。このような状況で，独占的競争に耐える書物を書くことは容易なことではない。しかし本書がその優れた特徴から高い評価を受け，長く命脈を保つことは間違いない。

2．特徴と構成

本書の特徴は，何と言っても，最近の世界の学会で取り上げられている新しいトピックスを取り入れると共に，これまでの国際経済学の共有財産を出来るだけ統一した枠組みで明らかにし，それについて詳しい，親切な説明がなされていることであろう。すなわち本書では簡単な図と式を沢山使って，最近の研究動向を含めた国際経済学の基本的なトピックスについて，手に取るように詳しい親切な説明がなされており，得られた結論が命題の形で明確に示されている。またキーワード，練習問題とその回答，参考文献などが付け加えられている。さらに今後の研究課題も示唆されている。現在の段階で望み得る最高の，そして非常に完成度の高い国際経済学のテキストであるといって間違いない。今年度の私のゼミナールで使ってみたが，学生たちに好評であった。

本書は次のような章から構成されている。

1章　国際経済学のフレームワーク
2章　国際貿易の基本モデル
3章　生産技術格差と貿易-リカード・モデル

4章　生産要素賦存と貿易-ヘクシャー＝オリーン・モデル
5章　貿易モデルの実証研究
6章　貿易政策の理論
7章　保護貿易の理論
8章　通商摩擦と通商交渉
9章　生産要素の国際移動

本書の章の構成と配列は，他の多くのテキストとほぼ同様である。しかし著者はこれまで国際経済学の分野で蓄積されてきた共有財産を，理論，実証，政策の順序にそって非常に明解に示されており，また各章で取り上げられているトッピクスやアプローチについても，さまざまな優れた工夫をされている。とりわけ理論の分野では，まず問題のエッセンスを単純化された設定で直感的に説明し，その後より一般的な枠組で考察するという形をとっている。そして読者がかなりのレベルに到達できるように配慮されている。また，各章で＊印のつけられた節や付論の多くは国際経済学の新しいトピックスであるが，そこでも著者の創意と工夫がちりばめられている。

各章では主として次のようなtopicsが取り上げられている。

第1章では，貿易が国内生産と国内消費を分離させることによって消費の機会を拡大すること，また国際資本取引が一国の所得と支出（アブソープション）を分離させることによって，アブソープションを拡大することが示される。これが貿易と資本取引の利益の基礎であることが示される。

第2章では，消費者行動と生産者行動のメカニズムの説明から始めて，貿易量と貿易パターンの決定，貿易均衡点の安定性，およびその応用を扱っている。

第3章では，リカード・モデルの特徴を明らかにし，その応用（例えばドイツ統一と比較優位），およびその拡張（多数財，生産性の変化の効果などへの）を行っている。

第4章では，ヘクシャー＝オリーン・モデルと4つの定理を，直感的な形と一般的な枠組みで説明し，自由な国際要素移動によって生ずる統合化された世界での均衡と，自由な貿易によって生ずる（自由貿易世界）均衡とを比較し，どのような条件の下で自由貿易世界が同じ均衡を達成するかを検討する。またfactor content of tradeの意味が明らかにされる。

第5章では，リカード・モデルとヘクシャー＝オリーン・モデルの実証研究（レオンチェフ・パラドックス），及びレオンチェフ以降の実証研究，さらに貿易モデルでは説明できない『定型化された事実』を説明しようとする新しいアプローチ-独占的競争と製品差別化の理論-などを取り上げる。

第6章では，間接的貿易政策，つまり輸入税（関税），輸入補助金，輸出税，輸出補助金の効果とそれらの関連性，さらに輸入割当などの直接的貿易政策の効果を明らかにする。

第7章では，市場のdistortionsにもとずいて保護貿易政策が主張されるさまざまなケースを明らかにし，戦略的貿易政策や幼稚産業保護論が正当化される理由とその限界を示している。

第8章では，通商摩擦と通商交渉の意味，日本市場の閉鎖性などを検討したうえで，貿易が連続的に行われる場合には自由貿易が達成される可能性があること，さらに地域統合の効果などが示される。

最後の第9章では，生産要素の国際移動の重要性を指摘し，要素移動の利益，最適課税論，ラマスワミ命題，異時点間貿易としての資本移動，直接投資論などが扱われている。

いずれも明解で，丁寧で，そして類書にない新鮮な説明がなされている。

以下，本書を一読して疑問に思った点や興味をもった点について，私見を述べることにしたい。

3．コメント

第1に，本書ではリカード・モデル，ヘクシャー＝オリーン・モデルと共に基本的な貿易モデル

として定着している特殊的要素モデルについて，あまりふれられていない。周知のように，特殊的要素モデルはヘクシャー＝オリーン・モデルの短期の側面を扱うことができるので，ヘクシャー＝オリーン・モデルのspecial caseと考えられるかもしれない。しかし貿易政策が所得分配に与える効果は短期と長期では異なり，短期的にはその生産要素がどの生産部門に属しているかが問題であるのに対して，長期的にはどの要素かが問題になるのである。そして貿易政策などで重要なのは，長期よりもむしろ短期の側面においてである。したがって，短期の側面を扱った特殊的要素モデルを取り上げる必要があるのではないか。また2財3要素の一般均衡モデルとしての特殊的要素モデルは，もしその特殊的要素の一つを天然資源とすれば，天然資源豊富国の貿易モデルを考える場合にも有効である。さらに2財3要素の特殊的要素モデルの場合，かりに両国で両財が生産されていて財価格が均等化しても，要素価格は必ずしも均等化しないのである。このように，特殊的要素モデルはヘクシャー＝オリーン・モデルと違ったさまざまな特徴を持っているので，特殊的要素モデルにおける貿易パターン，要素賦存と生産量，財価格と要素価格などの関係などを取り上げる必要があるのではないかと考える。

第2に，ヘクシャー＝オリーン・モデルでのストルパー・サムエルソン定理についての説明である。周知のように，両国で両財がconstant returns to scaleのもとで生産されている場合，ある財の相対価格の上昇はその財の生産に集約的に使用されている要素の実質報酬を引き上げ，他の要素の実質報酬を引き下げるのであるが，この点についての説明が必ずしも明確でない。図4-4（120ページ）で，rの上昇率は製造品（P_M）の価格の上昇率よりも大きいので，資本の報酬率は名目的だけでなく実質的にも上昇し，他方，労働の報酬wは名目的にも実質的も低下するであろう。このことは図4-4では明示されているにもかかわらず，ストルパー・サムエルソン定理として述べられている内容（123ページ）では，この点が必ずしも明確でない。

第3に，戦略的貿易政策の評価についてである。周知のように，不完全競争にはさまざまな形態があり，したがってさまざまなモデルがある。例えば，クールノー競争を仮定するBrander-Spencer(1985) モデルでは輸出補助金が望ましいが，ベルトラン競争を仮定するEaton-Grossman(1986) モデルでは，輸出税を課して自国財の価格を引き上げることが望ましい。前者の場合，両国間でレントのシフトが起こるのに対して，後者の場合両国企業の利潤が共に高まる。したがって，どのようなモデルを考えるかによって，結論が大きく異なる。また著者が指摘されるように（247-248ページ），戦略的貿易政策が有効であるためには，多くの厳しい仮定を想定しなければならない。確かに，constant returns to scaleと完全競争を仮定する貿易モデルの下では，輸出補助金が望ましい政策となることはないのに対して，規模の経済と不完全競争の下では財価格が限界費用を上回るので,補助金によってwelfareを高めることができるということを示した点で，戦略的貿易政策は新しい側面を開いたということができる。しかし政策の有効性はその産業構造，競争条件，その他モデルの仮定に大きく依存する。したがって，現在のところ戦略的貿易政策の有効性はかなり限られたものであり，それが一般的な形で支持されているとは思われない。このような点も指摘する必要があるように思う。ただし，今後ゲーム論が国際経済学により広く導入されるにつれてモデルが一般化され，その有効性が高まるかも知れない。

第4に，貿易を説明しようとする多様なアプローチが登場しつつあることを指摘する必要があるように思われる。我々は基本的な貿易モデルとして，Ricardo model, Hechscher-Ohlin model,およびSpecific Factor modelを持っているのであるが，それらはいずれも完全競争とconstant returns to scaleを仮定し，それぞれ労働生産性

の違い，一般的な（産業間を移動しうる）生産要素の賦存量の違い，特殊的要素の賦存量の違いによって，貿易パターンが決まることを示している。しかし1980年代に入って，独占，複占，独占的競争などの不完全競争，規模の経済，さらに政府の政策などによって貿易が生ずることを明らかにした，さまざまなモデルの展開が行われてきた。とりわけ VERs や VIEs などの managed trade に見られるように，政府の政策によって貿易が生じたり，貿易の流れが大きな影響を受けたりしている。この中の幾つかは本書でも取り上げられているが，このような国際経済学の大きな変化についても，もう少しスペースを割いて説明する必要があるように思う。

第5に，貿易モデルがどの程度現実的な支持を受けているかは，大きな関心事である。本書は『貿易モデルの実証研究』という章を設けて，比較優位モデルのさまざまな実証研究をとりあげている。これまで貿易モデルの実証研究について1章を設けているテキストはあまりないだけに，貴重である。とりわけ，レオンチェフ以降の実証研究を取り上げているのは貴重である。

第6に，本書には類書に比べて，はるかに広範な新しい国際経済学のトピックスが取り入れられており，非常に新鮮である。たとえば，3国以上からなる世界のトランスファー問題，ドイツ統一と比較優位，factor content of trade,独占的競争モデル，学習効果と経済成長，自由貿易と繰り返しゲーム，ラマスワミ命題などについて興味深い展開がなされている。

4．今後の課題

本書を読みながら，今後我々が究明すべき課題が沢山あるように思った。とりあえず，次の4点を指摘しておきたい。

第1に，周知のように，ヘクシャー＝オリーン・モデルから4つの定理が得られるが，それらは完全競争と constant returns to scale の下で得られている。この仮定を変えた場合にこれらの定理が成立するかどうかは，重要なトピックスである。例えばある産業が不完全競争（例えば寡占）下にある場合，要素価格均等化定理が成立するのかどうか，もし成立するとすれば，どのような条件の下においてであろうか。これは不完全競争下の貿易理論として究明すべき重要なテーマである。

第2に，いま世界経済は地域統合化に向かって動きつつあるが，地域統合の理論はなお開拓の余地がある。地域統合の理論は，これまで同一財を仮定して trade creation と trade diversion によって地域統合が prefer されるかどうかが扱われてきた。しかしそのような基準で統合がプリファーされているようには思えない。これまでのアプローチだけでなく，現実がそうであるように，パートナーから輸入する財とアウトサイダーから輸入する財が差別化された場合を考えてみる必要があると思う。その場合，地域統合によってパートナーからの輸入だけでなく，アウトサダーからの輸入も増えるであろう。地域統合には生産要素の移動と差別化財の貿易を拡大させる何かがある。この点の究明が必要である。

第3に，最近の世界経済のいま一つの特徴は生産要素の移動が活発に行われていることであるが，このような要素移動を考慮した場合に国際経済学の基本的な命題がどうなるかは重要な問題である。例えば，要素移動は交易条件に影響を与え，逆に交易条件の変化が要素移動に影響を与えるであろう。もし要素移動がその国の交易条件を有利化すればそれだけ利益を受け，不利化すればそれだけ損失を被るであろう。したがって要素移動と交易条件との関係などを明らかにする必要があるのであるが，それを完全競争の場合だけでなく，不完全競争の下でも検討する必要があると思われる。

第4に，これまで国際経済学はゲーム論をあまり積極的に取り入れてこなかったが，国際経済の多くのトピックスは基本的にゲーム論的な性格を持っている。例えば，貿易障壁の引き下げ交渉や国際的な債権債務関係はゲーム論的な性格を持っ

ており，また地域統合の進め方，政策協調のあり方，さらに国際（地球）環境保全の進め方なども，ゲーム論を用いて解明すべき点が非常に多い。勿論著者もこの点は承知しておられ，例えば貿易が繰り返して行われる場合には，自由貿易がナッシュ均衡になることを示されている。しかしゲーム論をより一般的な形で導入する必要があると思われる。

以上，今後の課題も含めて幾つかの点についてコメントしてきたが，いずれも本書の大きな貢献からすればマイナーなものである。今後本書の問題提起が出発点となり，多くの前進がはかられることを期待したい。

小　田　正　雄
（関西大学経済学部教授）